

初期ニーチェにおける言語の発生論
--グスタフ・ゲルバーからの影響に注目して--

東京大学 内田智之

はじめに

1873年に書かれたニーチェの論考「道德外の意味における真理と虚偽について Ueber Wahrheit und Lüge im aussermoralischen Sinne」（以下「道德外」と略記する）は、ニーチェが言語論や認識論という自らの思想の理論的側面を、まとまった形で論じた数少ないテキストである。このテキストや1872・73年の冬学期に行われたとされるバーゼル大学での講義「古典修辞学の叙述 Darstellung der antiken Rhetorik」（以下「修辞学講義」と略記する）^[1]、ならびに同時期の遺稿で、ニーチェは言語の発生を「メタファー」などの修辞学用語で記述する試みを行っている。

先行研究において「道德外」は、後期思想の萌芽がみられるものとして評価されることもあれば（コフマン(1986); Zavatta(2018)）、論述の整合性を巡る議論が行われるなど、様々な方面から注目されてきた^[2]。他方、「道德外」は同時代の生理学や言語学からの影響のもとで成立したことが明らかになっている。とりわけ、グスタフ・ゲルバーという言語学者の著書『芸術としての言語』からの影響は、きわめて大きなものと見なされており詳細な出典研究も行われている（Meijers (1988); Meijers & Stingelin(1988); Most & Fries(1994)）。

こうした研究状況を受けての本稿の狙いは、ニーチェはゲルバーから得た着想をどのように継承・発展させているのかを明らかにすることである。この目標を達成するための方法として、本稿ではゲルバーからの影響とその変奏が最も顕著にみられるものとして、「メトニミー」という概念についての所論を取り上げ、ニーチェがどのようにゲルバーのメトニミー論を解釈し、どのように言語の発生という問題に適用しているのかを明らかにする。これによって、ニーチェとゲルバーの差異から、初期ニーチェの認識論的立場が判明になる。なお、分析対象となるテキストは「道德外」と「修辞学講義」に加えて、1872年夏から1873年初頭の遺稿である。

本稿の論述は以下のように展開する。まず、ニーチェの言語論の発想の源に、ゲルバーからの影響があるという事実を確認する(1)。そして、ニーチェの言語発生論を「転移」という概念に注目して概観し(2)、「メトニミー」という現象について記述している箇所を注目して、ゲルバーとの差異を確認する(3)。それからここまでの考察で判明したゲルバーとの差異が、ニーチェの認識論にいかなる視座を与えているのかを明らかにする(4)。

1. ニーチェの初期言語論のコンテキスト

ニーチェの言語論的考察は言語の発生という問題と深く結びついている^[3]。そして、この問題意識は、「道徳外」や「修辞学講義」といったテキストにおいて展開されていく。両テキストの共通点としては、どちらのテキストにおいても、言語の発生基盤が「レトリック」に求められていることが挙げられる。例えば「修辞学講義」には以下のようにある。

言語そのものは専らレトリック的な技術、すなわちアリストテレスがレトリックと名づけた、各事物に関して効力があって印象的なものを発見し、妥当させる能力の所産にほかならない(KGW II/4, p. 425)。

また、同テキストには「言語はレトリックである」(KGW II/4, p. 426)という記述もある。もっとも、「修辞学講義」はレトリックを解説する大学の講義であるためか、様々な修辞的技巧についての解説は見られるものの、言語の起源についての立ち入った記述はない。しかし、上掲の独立引用で示された視座は堅持され、「道徳外」において言語のレトリック起源説が展開される。言うなれば、「修辞学講義」において示されているのは、ニーチェが言語論を展開するにあたって利用している基本的な道具立てであり、それを実際に使用し自説を展開したものが「道徳外」だといえる。「道徳外」の言語論についての詳細な説明は後に譲るとして、注目すべきは、ニーチェの言語論において、レトリックは言語の装飾的な補足物ではなく、言語の発生にかかわる本質的な要素として捉えられていることである。

そうした発想の源泉は、グスタフ・ゲルバーという 19 世紀の言語学者であることが指摘されている。ニーチェとゲルバーの関係についての詳細な研究として Meijers(1988)が挙げられる。Meijers(1988)によれば、ニーチェが主として参照したゲルバーのテキストは『芸術としての言語』であり、そこには言語が人間の「芸術的」と形容しうるような想像力の産物であって、言語が言語外的な実在に貼り付けられるラベルのようなものではない、という主張が確認できる(Meijers 1988, pp. 376-380)。実際、ゲルバーは「あらゆる言葉は音声的象徴(Lautbilder)であり、その意味に関してはそれ自体として元来、比喩である。言葉の起源が芸術的であるように、その意味もまた芸術的直観によって変化してきた」(Gerber 1871, p. 333)と記している。また、Meijers(1988)によれば、ニーチェが言語とレトリックの関係について述べている「修辞学講義」の第三章は、『芸術としての言語』からの引用やパラフレーズが大半を占めている(Meijers 1988, p. 381)。

自らの講義の資料として『芸術としての言語』から多数の引用・パラフレーズを行うだけでなく、そこに自らの主張を混ぜ込んでいるという点から、ニーチェはゲルバーの主張をほとんど全面的に受容しているかのようにさえ見える。ニーチェとゲルバーの差異という問題に対してこれまで様々な応答が試みられてきた。

Meijers(1988)は、ゲルバーが「物自体→神経刺激→感覚→音→表象→語根→言葉→概念」というモデルで言語の成立を捉えるのに対して、ニーチェは「物自体→像（あるいは直観のメタファー）→音（あるいは言葉）→概念」というモデルで捉えているという違いを指摘している(Meijers 1988, p. 386)。また、Borsche(1994)によれば、ニーチェはゲルバーとは異なり、①言語の起源についての論述を学問的記述ではなく一種の哲学的神話として考えているほか、②同時代の神経生理学の知見を用いている(Borsche 1994, pp. 127-130)。Emden(2004)も Borsche(1994)とほぼ同じく、「ニーチェは言語とレトリックについての考察に神経生理学の知見を接続することで、レトリック的な心のモデル(rhetorical model of mind)を構築した」(Emden 2004, pp. 91-92)と述べる。しかし、以上の研究による指摘は文献上の事実の確認が主であり、ニーチェがゲルバーの言語論をどのように継承・発展させたのか、という問題には応答できていないように思われる。実際、Crawford(1988)のように、ニーチェの言語論の大部分はゲルバー受容以前に、カントやショーペンハウアー、ランゲなどの影響のもとで形成されていたとして、ゲルバーからの影響の重要性を低く見る研究もある(Crawford 1998, p. x)。

しかし、両者の論述を検討してみると、ニーチェはゲルバーの言語論を換骨奪胎することで自らの思索の糧としたことがわかる。特に、本稿では両者の言語論において、「メトニミー」という修辭的技巧に与えられた役割の差異に注目する。なぜなら、以下で論証していくように、ニーチェが展開するメトニミー論は初期ニーチェの言語論の理論的支柱と言いうる地位を占めているからである。

2. 言語論におけるメトニミーの位置

以下ではメトニミーについての記述を中心に扱うことになるが、メトニミーについての記述は、言語論の全体と切り離すことができない。そのため、以下ではまず、「道徳外」で展開される言語起源論の全体像を素描しておく。

初期ニーチェの言語論は、神経刺激の受容から知覚表象の形成を経て概念の形成に至るプロセスとして、言語の発生を描き出している。このプロセス

において、神経刺激→知覚表象と知覚表象→概念形成という仕方で、異質な領域間の移行が果たされているとニーチェは考え、異なる領域間を媒介する運動を「転移(Übertragung)」と呼んでいる(KSA 1, WL, pp. 879-880)。そのため転移には大別して、知覚の発生に関わる側面(神経刺激から知覚表象の形成)と概念的理解を構成する側面(知覚表象から概念形成への移行)の二つの側面があると言える^[4]。後者の側面にゲルバーからの影響が色濃くみられるため、本稿では後者の側面のみを取り上げる。

後者の側面において、転移という現象はさらに三つの修辞技法によって分析されている。それは、シネクドキ(提喩)、メタファー(隠喩)、そしてメトニミー(換喩)である。Meijers(1988)によれば、数ある修辞的技巧のなかで、これら三つを特権化する手法はゲルバーに見られるものであり、ニーチェはそれを引き継いでいると考えられる(Meijers 1988, p. 381)^[5]。ニーチェはこれら三つの修辞技法を、人間の認知過程の構造と類比的なものに見なし、知覚の成立から概念的な内容をもつ言語の成立に至る過程を、これらの修辞学的概念によって分析している(Zavattta 2018, p. 201-205)。以下では順に各技巧と認知構造の類似性を確認していく。

「修辞学講義」でシネクドキは、部分によって全体を指示する技法と定義される(KGW II /4, p. 426)。これ認識論的には、際立った性質を通じて、ある対象の全体について一定の理解を生み出すことであるとされる。「道徳外」では、そうした操作が「蛇」の命名に関係するものとして語られている。ニーチェは「蛇(Schlange)」が「巻きつく(schlingen)」から派生した語であるとして、以下のように述べている。

私たちは蛇について語るが、名指しは身を振ることにしか関係していないため、ミミズにもそれは当てはめることが出来よう。なんと恣意的な限定、なんと事物のかくかく云々の性質の片面的なえこひいきか！(KSA 1, WL, pp. 878-879)

ここではシネクドキという言葉は用いられていないが、『芸術としての言語』のシネクドキに関する箇所はこの箇所とほぼ同様の記述が見いだされる^[6]。

二つ目に、メタファーは「ある点において類似していると見なした何かを、同一のものとして取り扱うことである」(KSA7, 19[249])とされる。つまり、メタファーは類似性を介して、二つの異なるものを同一化する技巧である。「道徳外」において、メタファーは葉の概念を形成するために、複数の個物をもつ「個別的な差異を恣意的に看過する」ことで個物を同一化する段階に

相当すると考えられる (KSA 1, WL, p. 880; Cf. KSA 7, 19[236]; 19[242])。

最後に、メトニミーは修辭的技法としては、原因と結果との交換、すなわち「汗」で「労働」を表現するように、結果であるものによって、原因であるものを指示する技法と定義される (KGW II /4, p. 427; KSA7, 19[204])^[7]。ニーチェがメトニミー的な転移に認めているのは、事物を本質という観点から理解する思考法である。一見すると、「道德外」で概念形成のプロセスが論じられている箇所には、メトニミーについての記述は見られない^[8]。しかし、「道德外」では概念形成過程における異なるものの同一化 (メタファー) についての記述のあとに、「「葉」そのものである何か、つまり根源的形式のようなものが存在するかのようなイメージ」 (KSA1, WL, p. 880) が発生する段階が想定されている。

この段階こそがメトニミーに対応するものであると考えられる。なぜなら、ここでは以下のような仕方で因果関係の逆転が生じているからだ。すなわち、認識の順序としては、まずメタファーによる同一化があり、それに続いてイデア的な「根源的形式」が想定される。しかし、こうした認識プロセスは無意識的なものであり、「根源的形式」はそれに即して「すべての葉がくみ上げられ、描写され、測定され、色づけられ、襲をつけられ、色を塗られている」ものとして理解されるがゆえに、「葉」という概念的理解が生じたのは「根源的形式」のゆえであると解釈される。つまりニーチェにおけるメトニミーとは、概念的理解から本質を想定するという方向でなされた信念形成の順序を、本質による概念的理解の発生という順序に逆転して解釈することなのである。

以上のようなニーチェにおけるメトニミーの役割は、ゲルバーの所論におけるそれに比して、言語の発生においてより重要なものになっている。

確かにゲルバーにおいてもメトニミーは取り上げられている。しかし、ゲルバーが自然言語にメトニミー的な要素がみられる例として挙げているのは、もっぱら抽象名詞というローカルな言語的カテゴリーを論じる場面である。ゲルバーによれば、「いわゆる抽象名詞」には「自立性という形式」が含まれており、それゆえに抽象名詞においては、当該の形式が個別のものにおいて現象する性質の基礎として描写される (Gerber 1871, p. 383.)。それゆえゲルバーは「抽象概念が感性的領域において作用する力として、すなわち自立した威力として現れてくる」 (Ibid.)、と述べ、「それゆえ、私たちの内外の特性はその担い手から切り離され、自存する本質として定立される」と続ける (Ibid.)。すなわち、ゲルバーは抽象名詞が名指されるものがあたかも実在していると理解される、という仕方で言語におけるメトニミー的契機を説明する。ゲルバーにおいては、メトニミーは抽象名詞についての素朴な理解を説

明するために用いられる。

以上のように、ゲルバーとは異なり、ニーチェにおけるメトニミーは抽象名詞についての了解に限られるものではなく、言語一般の発生構造を記述するものであった。実際、ニーチェは概念形成についての所論のなかでメトニミー的な構造を見いだしているし、ニーチェが挙げている例には「葉」の概念が含まれている。したがって、以下のようにニーチェとゲルバーの相違を整理することができる。ゲルバーの場合、言語のなかの抽象名詞というローカルな事例に関するものとして、メトニミーが位置づけられている。これに対してニーチェが行おうとしているのは、言語の創設的な場面の記述である。そこでニーチェは、メトニミーを概念形成の一般的構造のなかに位置づけている。つまり、ゲルバーにとってメトニミーは言語の限定された領域に見られるものだが、ニーチェにとっては一般に言語が成立する場面に見られるのである。

3. メトニミーと規範としての言語

以上より、ニーチェはゲルバーのメトニミー論を拡張し、言語一般の発生構造として理解したことが明らかになった。しかし、これだけではなぜ言語の発生についての記述に、メトニミー的な契機があると考えられたのかが依然として不明である。この問題に関して、「道徳外」を論じたいくつかの先行研究はメトニミーについての記述を、言語の発生に随伴する単なる錯覚についての述べたものとして理解している^[9]。これに対して、本稿はメトニミーを言語の発生に関わる不可欠の要素として位置づける。なぜなら、メトニミーには言語を規範的なものとして創設するという独特の役割が担わされているからである。

「道徳外」において想定されている言語にとって、複数の個物に妥当する一般性とならんで、規範性が重要なメルクマールとなっている。言語の規範性というのは、言語にはそれを使用するための規則があり、それに逸脱することは規範に背くことと見なされて、とりわけ原始的な社会においては制裁を蒙るということである。「道徳外」には以下のようにある。

虚言者は妥当な描写、すなわち言葉を用いて、真実ならざるものを真実であるものとして見せかけようとする。虚言者は例えば、私は裕福であると述べるが、他方、この状態では「貧しい」が正しい描写なのである。虚言者は偽造あるいはまったく名辞を反対の意味で用いることによって、確固たる慣習を濫用する。虚言者がこうしたことを利己的で何より損害

をもたらすような仕方でおこなうとすれば、共同体は最早彼のことを信頼せず、それによって彼を共同体から排除してしまう。(KSA1, WL, pp. 877-878.)

また、遺稿では、「政治的共同体では確固たる意見の一致が必要」であり、「どんな言葉も多数者が用いるのと同じように使用することは、政治的慣習であり、道徳であるとされている」(KSA7, 19[229])とされている。

規範性が要請されるのは、言語の道具的な側面に関係している。ニーチェによれば、言語を合意形成の必要に迫られて形成されてきた生存のための道具である。曰く、「人間は平和維持の取り決めを必要とし、それに応じて野蛮極まる万人の万人に対する闘争を地上から消し去ろうとつとめる」(KSA 1, WL, p. 877)。かくして、人々の間で合意の形成を可能にするものとして言語が登場する。

今や、何がこれから「真理」であるべきかが確定される。つまり、事物についての等しく妥当し拘束力のある描写が発明され、言語の立法が真理の第一の法則をも設定するのだ。(Ibid.)

言語によって、何をどのように呼び、どのように規定すべきかについての共通理解が生み出される。言語は合意形成という実践的な目的に奉仕している。以上よりニーチェは、言語には規範的拘束力をもつ側面があることを強調していると言える。したがって、ニーチェの言語起源論にも言語の規範性が生じる場面が設定されていると考えられる。では、いかにして言語のもつ規範的拘束力の発生は説明されるだろうか。

ニーチェ自身は明言していないが、シネクドキやメタファーによっては不可能であると考えられる。なぜなら、これら二つの操作にできるのは、対象についての知覚的な情報から対象の際立った特徴を取り出してくることにとどまるからだ。言い換えれば、シネクドキやメタファーは対象がどのようなものであるかについての情報を与えるが、対象が何であるかについて語ってはくれない。

他方、メトニミーであればそれが可能である。なぜなら、メトニミーのみが言語を客観的に存在するものについての語りにするからだ。

ニーチェが意見の一致を作り出すための規範性を、言語に必要なものと考えていたことはすでに確認したが、この規範性は存在論的な次元にその基礎をもつとされる。

政治的共同体においては確固たる意見の一致が必要であり、そうした一致はメタファーの慣例的使用にもとづいている。[……]真であるということは、事物の慣例的な意味から外れていないということである。真であるのは存在者であり、非存在の反対である。第一の規約は何が「存在する」とみなされるべきであるか、についてのものである。(KSA7, 19[229])

ここでニーチェは言語が持つ存在論的な要請について語っている。すなわち、言語が真と偽の区別をもつものとして機能するためには、名指される存在者が存在するとみなすことが必要であるということ、いわゆる存在論的コミットメントの不可欠性について語っていると考えられる。存在論的コミットメントとは、例えば、「葉」という語彙をもつ言語は「葉」を存在者として認めていることになる等々を意味する。存在論的コミットメントは、言語の規範性と切り離すことができない。というのも、対象についての何らかの概念的規定が合意を要請するものとしてなされるとすれば、それが客観的なものによって正当化されていると想定されていなければならないからである。例えば、「葉」の例でいえば、主観的にそう思われるだけであるという事態を超えて、客観的に「葉」として同定されるべきものが存在するからこそ、「葉」という語彙を備えた言語が成立する。

こうした言語の存在論的コミットメントの発生はメトニミーによって以下のような仕方で説明されると考えられる。メトニミーは概念形成において、概念 A（例えば葉の概念）が形成された原因を概念形成に先立つ事物の本質 A（葉の本質）を設定する。これによって、A として理解された対象は、客観的に A として理解されるべき存在者（葉のトークンである存在者）だということになり、A が存在するものとして認められる。つまり、言語の規範的拘束力は、ある種の存在者が存在するものとして認められることから生じており、この存在者の設定にメトニミーが働いている。メトニミーは概念形成の因果的順序を逆転させて、概念的規定があたかも対象のそれ自体としての在り方に対応しているかのように信じ込むことを可能にしている。これによって、言語の規範的要請が世界の客観的な記述だと理解される。

以上の考察をまとめれば次のようになる。対象の概念的規定はシネクドキ・メタファー・メトニミーのような、人間の恣意的な世界理解の産物である。しかし、メトニミーによってそれが客観的な事物によって正当化されているかのような信念が生じ、恣意的な概念的規定であっても事物それ自体の在り方に対応するものとして受け入れるべきものと考えられる。これならば、ニ

ニーチェが概念形成の過程にメトニミーを位置づけた理由もわかり、ニーチェの趣旨に合っているとと言える。また、以下の遺稿はニーチェが上述したような考えをもっていたことの証左であると考えられる。

抽象化はメトニミー、すなわち原因と結果の交換である。さてしかし、あらゆる概念はメトニミーであり、概念において認識作用が生じる。「真理」は、私たちがそれを抽象として剥離させてはじめて、力となるのである。(KSA7, 19[204])

一・二文目では、概念形成にメトニミーが不可欠である旨が述べられている。三文目は一見すると前文との連関が不明瞭だが、本稿が提示した読解であれば整合的に読み解くことができる。すなわち、言語と存在者の結びつきの確立によって、言語と事物の一致として「真理」が成立するのだが、それが「力」として拘束力のあるものになるのは、メトニミーによって主観の単なる現れから剥離して、存在者によって基礎づけた場合なのである。

4. ニーチェ認識論における人間知性の基本特徴

以上で見てきたように、ニーチェの言語論は言語の規範的構造さえも、客観世界に由来するものではなく、主観的な領域において生じる転移現象によって発生論的に説明しようとするものであった。そして、こうしたニーチェの試みは、人間知性の本性を真理の認識ではなく、発見する能力と自らの見解を妥当させる能力によって特徴づけようとするものであると理解することができる。

本稿第一節で指摘したように、ニーチェは「修辞学講義」において、言語の発生基盤となる能力について次のように述べている。

言語そのものは専らレトリック的な技術、すなわちアリストテレスがレトリックと名づけた、各事物に関して効力があって印象的なものを発見し、妥当させる能力の所産にほかならない。(KGW II/4, p. 425)

ここに見られる発見能力と妥当させる能力という区別は、「道徳外」においては、メタファー（ないしシネクドキ）による対象の諸側面の発見という操作と、メトニミーによる規範化に対応すると考えられる。つまり、人間知性は恣意的な発見を必然的なものとして解釈しなおすことで、他者に対して主張可能なものとして、自らの世界理解を構成するものだと考えられているので

ある。ここで重要なのは、認識における発見的な契機の先行性である。すなわち、ニーチェにおいて認識という活動は、真理をめぐって行われるのではなく、あらかじめ見出されていた特定の見解を真なるものとして解釈しなおす活動、いわば信念を真理化する活動として特徴づけられているのである。メタファーなどによる発見的操作は、世界の客観的構造を模写するものではない。確かに、メタファーには知覚的情報という素材が必要だが、この知覚さえも外界の対象のあり方を反映したのではなく、神経刺激の転移によって生み出されたものであるとされている(KSA1, WL, pp. 879-880)。

さらに、ニーチェの考えでは、真理の発見という営為は、メタファーやメトニミーといった修辞学的な操作の結果として得られた基準を用いてはじめておこなわれるものであるため、人間知性の活動としては副次的なものにすぎない。ニーチェは次のように述べる。

誰かがある事物を藪の中に隠して、その事物をふたたびそこに探し求めて発見するならば、こうした探究と発見はさほど讃嘆に値するものではない。ところが、理性の圏域の内部における「真理」の探究と発見は、これと同じことなのだ。私が哺乳類を定義し、ラクダを見た後でこのように説明したとしよう。見なさい、哺乳類だ、と。これによってある真理が明らかになったわけだが、この真理には限られた価値しかない。(KSA1, WL, p. 883)

このように、真理の探究・確証という反省的な知的活動を人間知性の本質に位置づける知性観^[10]に対して、ニーチェは発見と信念の真理化の先行性を主張する。したがって、ニーチェにおいて知性とはあらかじめ世界の側にある真理を明らかにするものではなく、自らの見解を事後的に正当化する能力であると言えるだろう。知性による発見という契機には、認識者の利害関心や創造性などの要因が関係してくると考えられるが、「道徳外」のニーチェは発見を可能にする要因について多くを語っていない。それについての詳細な論述は、中後期思想におけるいわゆる「パースペクティヴィズム」の発展を待たなければならないと考えられる(Cf. KSA5, GM, pp. 364-365)。

結論

以上の考察で明らかになったように、ゲルバーがニーチェに与えた有意な影響の一つにメトニミーについての考えがある。ニーチェはゲルバーのメトニミー論をいわば普遍化して、言語の発生構造と関係づけることによって、

言語的規範性の発生を概念形成から指示対象の存在措定に至る過程として記述している。ニーチェによれば、何を存在者として認めるかについての決定によってはじめて、正しい言語使用と誤った言語使用の区別がなされるが、この決定自体は概念形成の結果であるものを概念形成の原因として解釈するメトニミーによってなされている。ニーチェはゲルバーの言語論を換骨奪胎することによって、メトニミーというプロセスを言語的な規範の源泉として位置づけているのである。そうすることでニーチェは、人間知性を発見能力と妥当させる能力という二つの側面を主たるものとして捉える認識観を打ち出している。

本稿で行った考察は、ニーチェとゲルバーの影響関係の解明のみならず、ニーチェの認識論を支える人間知性についての基本的な視座を明らかにするものでもあった。その点を踏まえて、初期ニーチェ、とりわけ『悲劇の誕生』における主知主義批判や、中後期における認識論の展開を明らかにする研究が求められるだろう。

注

1) 「修辞学講義」は正確な成立時期に関して文献学的な議論がある。本稿は Behler(1988)や Meijers(1988)、山口(2011)に基づいて、1872年に執筆されたという説を採用する。

2) Miller(1981)や Clark(1990)は「道徳外」の議論に不整合があるという立場をとっている。Miller(1981)や Clark(1990)によれば、「道徳外」でニーチェは「あらゆる言明は偽である」という自己論駁的な主張を行っている(Miller 1981, p. 50; Clark 1990, p. 83)。他方、Andresen(2010)や Rayman(2007)は Clark(1990)を批判して、「道徳外」の議論はあくまでも整合的に読み解くことができるという立場をとる。詳論することはできないが、本稿も Andresen(2010)や Rayman(2007)と同じく、「道徳外」の議論は自己論駁的ではないという立場をとる。

3) もっとも、ニーチェが言語の発生を概念の形成と同一視しているため、言語の発生についての十分に包括的な議論が展開されているとは言い難い。こうした事態が生じた原因については須藤(2011)の 284 頁-285 頁を参照。

4) 転移の概念については、「道徳外」を取り扱う研究の多くが取り上げている。転移の概念の成立に関わる各方面からの影響を整理したものとしては、Emden(2004)が有用である。また、須藤(2011)は神経刺激からの転移の産物として、一切のものを構成しようとする初期ニーチェの立場を、「感覚一元論」と呼んでいる(須藤 2011, p. 277)。転移の概念についての概観的な説明は、

Zavatta(2018)を参照。紙幅の関係上、すべての研究を紹介することはできないが、以上のほかにも Meijers(1988)、Schrift(1989)、Gray(2007)などが挙げられる。

5) ただし、各種レトリックに見られるゲルバーからの影響の程度はまちまちである。シネクドキに関しては、ニーチェは『芸術としての言語』の論述をそのまま用いている (KSA1, WL, pp. 878-879; Gerber 1871, p. 366; Meijers&Stingeln 1988, p. 367)。メタファーについては、Gray(2007)によれば、『悲劇の誕生』以来の「象徴」の概念をもとに成立しており、ゲルバーからの影響というよりもニーチェの独創と考えられる (Gray 2007, pp. 46-47)。そして、以下で見ていくようにメトニミーについての記述に、ゲルバーの受容・展開が最も顕著にみられる。

6) この点については本稿注 5 を参照。なお、シネクドキには、全体によって部分を指示する場合もあるとされる。例えば、「お花見」という表現では「花」というカテゴリーの一部である「桜」を指している(谷口 2003, p. 132)。しかし、本稿ではあくまでもニーチェの記述にしたがった用語法を用いる。

7) ニーチェはこのように定義しているが、伝統的にはメトニミーとは「近接性に基づく比喩」と定義される(谷口 2003, p. 119)。例えば、「ウォール街はパニックに陥っている」のように、場所でそこにある機関を意味する場合などもメトニミーに含まれる(Ibid.)。

8) もっとも、「道徳外」でも真理とは「メタファー、メトニミー、擬人法の機動的な集合体」(KSA1, WL, p. 880)であるとされる。

9) 先行研究では主として、メトニミーは誤謬を生み出すものというネガティブな特徴づけが、主として後期思想との関連のもとでなされてきた。メトニミーのネガティブな側面を強調する研究の代表としては、De Man(1979)が挙げられる。De Man(1979)はメトニミーについての記述を、諸々の概念は実在そのものに根拠を持つのではないということを指摘する、ニーチェの「脱構築」にとって中心的なものとみなし、「内的世界の現象論」と題された後期の遺稿(KSA13, 15[90])との連続性を指摘している(De Man 1979, p. 111)。De Man 以外の論者も、メトニミーと後期の遺稿や『偶像の黄昏』で論じられる「原因と結果の取り違えの誤謬」とのつながりを強調する(Zavatta 2018, p. 208; 山口 2011, pp. 105-107)。これらの先行研究は後期思想におけるメトニミー論の展開を指摘しているものの、「道徳外」で論じられている概念形成過程におけるメトニミーの不可欠性は取り上げていない。他方 Schrift(1989)は総合判断とメトニミーの関係を論じるという点で本稿とは異なる手法をとるものの、メトニミーが概念形成に不可欠であると指摘して

いる(Schrift 1989, pp. 380-381)。

10) 本稿では詳述できないが、ニーチェは『悲劇の誕生』において、このような知性観を「ソクラテス主義」と呼んでいる(Cf. KSA1, GT, p. 100-101)。

参考文献

1. ニーチェのテキスト

ニーチェのテキストからの引用は既訳を参考にしつつ自ら訳出したものであり、適宜原語を括弧()で記載した。また、訳文の傍点は原文中のゲシュペルトに対応する。

「道徳外の意味における真理と虚偽について Ueber Wahrheit und Lüge im aussermoralischen Sinne」、『悲劇の誕生 Die Geburt der Tragödie』、『道徳の系譜学 Zur Genealogie der Moral』、そして遺稿からの引用は以下の文献による。

Friedrich Nietzsche: Sämtliche Werke: Kritische Studienausgabe. Hrsg. von G. Coli und M. Montinari. München. De Gruyter. 1980.

「道徳外の意味における真理と虚偽について」(略号: WL)、『悲劇の誕生』(略号: GT)、『道徳の系譜学』(略号: GM)を参照指示する場合、KSA・巻数・略号・頁数の順で記載する。遺稿からの引用の場合、KSA・巻数・整理番号の順で記載する。

「古典修辞学の叙述 Darstellung der antiken Rhetorik」からの引用は以下の文献による。

Nietzsche Werke. Kritische Gesamtausgabe. De Gruyter. Hrsg. von G. Coli und M. Montinari. 1967ff.

引用の際には、KGW・部数(ローマ数字)・巻数(アラビア数字)・頁数の順で記載する。

2. 二次文献(欧語)

Behler, Ernst. 1988. Nietzsches Studium der Griechischen Rhetorik nach der KGW. *Nietzsche-Studien* 27. De Gruyter: 1-12.

Borsche, Tilman. 1994. Natur-Sprache *Herder-Humboldt-Nietzsche.* in Tilman Borsche and Aldo Venturelli(Hrsg.), *Centauren-Geburten: Wissenschaft, Kunst und Philosophie beim jungen Nietzsche,* De Gruyter: 99-112

Crawford, Claudia. 1988. *The Beginnings of Nietzsche's Theory of*

Language. De Gruyter.

Clark, Maudemarie. 1990. *Nietzsche on Truth and Philosophy*. Cambridge University Press.

De Man, Paul. 1979. *Allegories of reading: figural language in Rousseau, Nietzsche, Rilke, and Proust*, Yale University Press.(2012. 『読むことのアレゴリー――ルソー、ニーチェ、リルケ、プルーストにおける比喩的言語』, 土田知則訳. 岩波書店.)

Emden, Christian. J. 2004. Metaphor, Perception, and Consciousness: Nietzsche on Rhetoric and Neurophysiology. in G. Moor and Th. H. Brobjer (eds.), *Nietzsche and Science*. Ashgate: 91-110.

Gray, Richard. T. 2007. »Die Metamorphose der Welt in den Menschen«: Übertragung, Metapher und Anthropomorphism beim frühen Nietzsche. in Klaus Vieweg und Richard. T. Gray (Hrsg.): *Hegel und Nietzsche. Eine literarisch-philosophische Begegnung*, Bauhaus-Universität: 42-69.

Gerber, Gustav. 1871. *Die Sprache als Kunst*. 1st ed. Mittler.

Meijers, Anthonie. 1988. Gustav Gerber und Friedrich Nietzsche *Zum historischen Hintergrund der sprachphilosophischen Auffassungen des frühen Nietzsche*. in *Nietzsche-Studien* 17: 369-390.

Meijers, Anthonie, and Martin Stingelin. 1988. Konkordanz zu den wortliche Abschriften und Übernahmen von Beispielen und Zitaen aus Gustav Gerber: *Die Sprache als Kunst*(Bronberg 1871). in *Nietzsche Studien* 17: 350-368.

Miller, J. Hillis. 1981. Dismembering and Disremembering in Nietzsche's "On Truth and Lies in a Nonmoral Sense. in *Boundary* 2 9. 3: 41-54.

Most, Glenn and Thomas Fries. 1994. Die Quellen von Nietzsches Rhetorik-Vorlesung. in Tilman Borsche and Aldo Venturelli(Hrsg.), *Centauren-Geburten: Wissenschaft, Kunst und Philosophie beim jungen Nietzsche*: 17-46.

Rayman, Joshua. 2007. Nietzsche, Truth and Reference. in *Nietzsche-Studien* 36: 168-181.

Scheibenberger, Sarah. 2016. *Kommentar zu Nietzsches Ueber Wahrheit und Lüge im aussermoralischen Sinne*, De Gruyter.

Schrift, Alan. D. 1989. Language, Metaphor, Rhetoric: Nietzsche's Deconstruction of Epistemology. *Journal of the History of Philosophy* 23.

3: 371-395.

Zavatta, Benedetta. 2018. Nietzsche on Tropes as Embodied Schemata. in Manuel Dries(ed.), *Nietzsche on consciousness and the embodied mind*. De Gruyter: 195-214.

3. 二次文献（邦語）

コフマン, サラ. 1986. 『ニーチェとメタファー』. 宇田川博訳. 朝日出版社.

須藤訓任. 2011. 『ニーチェの歴史思想』,大阪大学出版会.

谷口一美. 2003. 『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』. 研究社.

山口誠一. 2011. 『ニーチェ『古代レトリック講義』訳解』. 知泉書館.